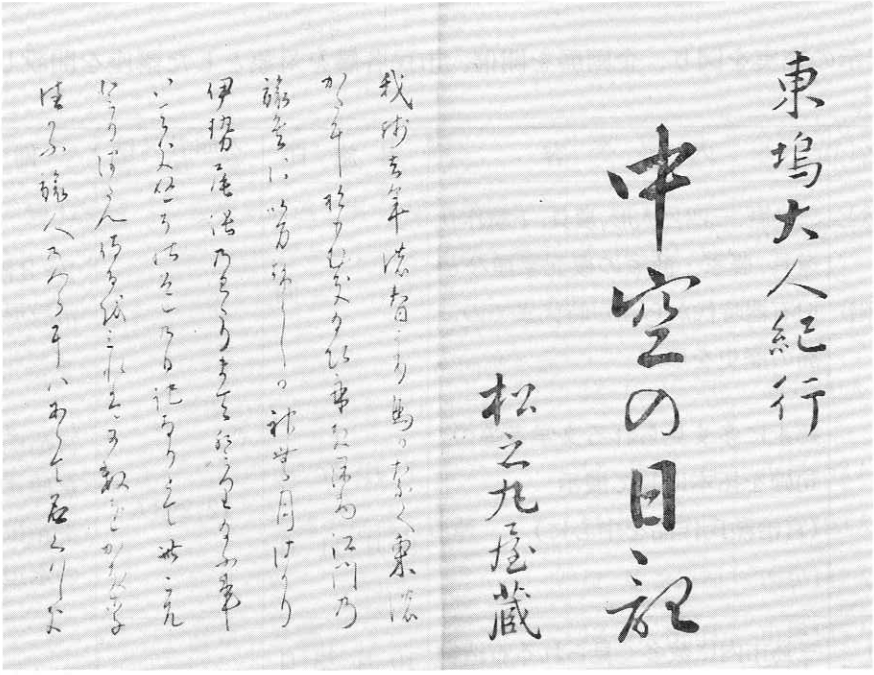
三島市　（通巻第52号）

郷土館だより

Vol. 18. No.1
1995. 11. 30

香川景樹の「中空の日記」



郷土館では、本年度の史料解読集で、江戸時代の歌人、香川景樹の「中空の日記」を刊行します。内容は、景樹が江戸から津島までの東海道の旅で、ところどころに和歌を挿入しつつ、美しい文章で構成した歌日記です。

景樹は、明和５年（１７６８）因幡国鳥取藩士の荒井小三次の二男として生まれています。幼くしてよく文を読み、書を写し、７歳の年には師について和歌を学び始めたと伝えられます。２６歳で京都に出、香川景柄の養子になり、以来香川の姓を名乗ります。景樹６０歳の年には頼山陽が門下生になるなど、名声は高まり、円熟期を迎えます。代表歌集「桂園一枝」が刊行されたのもこの頃です。天保１４年（１８４３）景樹は七十六歳の生涯を閉じましたが、彼の歌風は桂園派の門人たちに引き継がれ、当時の和歌世界の主流を占め、明治以後の御歌所和歌の源流を形成します。

景樹が出した歌集の一冊、それが「中空の日記」（天保３年、京都・河南儀兵衛刊）でした。日記は文政元年の秋「神無月二十三日」に江戸を出発するところから始まります。

東海道を順調に上り、三島に到着したのは１１月７日のことでした。さっそく景樹は三島の社（現在の三嶋大社）に詣で二首を詠じました。

「散かかる　いてふの一葉　袖にうけて　やがえもぬさと　手むけまつらん」

「ひとの親の　ここいの杜の　木がらしは　身をわけて吹く　ここち社すれ」

また、三島暦を買い求めての感想は次のようでした。

「此さとに三島暦とて、世に名高くものせるは、ことなるふしもやあらんずらんと、かひもとめて見るに、ただ一とぢの冊子にて、そのさまのみぞかはれる」

世に名高い三島暦だから、ほかの暦（景樹の場合京暦）とはどこか内容に変わったところでもあるのではないかと買っては見たが、ふつうの一綴りの暦で、形態のみが少し変わっていただけであった、と、少し落胆しています。そして、また一首。

「はかなしや　五十あまりの　年月も　夢と三島の　暦なりけり」

景樹はやがて来る春に期待を寄せることがあったのでしょう。しかし、三島暦には、彼が期待するような新しい内容は見つからなかったのでした。それもそのはずです。当時の暦は江戸も京都も三島も同じ内容で統一されていたからです。

こうして、景樹が津島に到着したのは、文政元年の師走一日のことでした。

平成６年度　三島市郷土館事業報告

郷土館では、常設展示の充実を図り、企画展を開催、市民各層を対象とした講座を開設しました。主なものは次の通りです。

区　分	事　業　名	内　　容	実　施　日	入館者又は参　加　者	備　　考
常設展示	ふるさとの自然と民俗（２階） 三島の歴史（３階）	三島暦、三四呂人形、農具、下駄作り道具、農家・商家の復元家屋など旧石器時代から江戸時代までの三島の歴史を展示	年　　間		２・３階は常設展示場
企画展示	句碑と拓本	郷土に多く見られる文学者等の句碑を拓本にして展示 （宮治勲氏作品を中心に）	７月 17 日 ～ ９月 11 日	12,293人	宮治氏作品松尾芭蕉他オープンロード箱根八里。三島の水辺文学散歩
	三島の石造物	三島市内に数多く見られる石造物を写真展示し、地域の民間信仰のかかわりを理解する。	10 月 23 日 ～ １月 16 日	15,346人	サイの神、庚申塔、唯念・徳本名号
	三島の成り立ちⅠ	自然環境、地形、街道を基本に成立した郷土を歴史的に史料で解説	２月 26 日 ～ ５月 ７ 日		三嶋大社関係、仏教関係、山中城関係、三島暦関係他
教育普及	縄文土器作り教室	夏休みを利用し、土器作りをとおして古代の生活に対する理解・学習する体験教室	７月 21 日 23 日 ８月 24 日		講師 館職員
	郷土教室	「はた織りと糸つむぎ」糸からつむぎ、はた織	６月 11 日	小学生4～6年 14人	井上一雄氏
		「竹細工作り」 ナイフを使いゆらりトンボ・竹トンボを作った	７月 ９ 日	小学生4～6年 35人	瀬川　到氏
		「古代の生活・火おこし」火おこしの道具の説明を受け実際に火を起こした。	９月 10 日	小学生4～6年 22人	池谷初恵氏
		「昔話を聞いて農具を使おう」昔の遊びや生活の話を聞き昔の農具を使い稲から米になるまでを体験した	11 月 12 日	小学生4～6年 21人	鈴木辰己氏
		「紙飛行機を飛ばそう」型紙より飛行機を作り飛ばした。	12 月 10 日	小学生4～6年 17人	瀬川　到氏

区　分	事　業　名	内　　容	実　施　日	入館者又は参　加　者	備　　考
教育普及	夏の郷土学習	「箱根旧街道を歩く」接待茶屋から三ツ谷松雲寺まで歩き、史跡や歴史の話を聞いた。	8 月 10 日	小学生4～6年 26人	杉浦幸男氏
	郷土館講座	「三島の石造物めぐり」市内唯念碑を中心に石造物を探り歩いた。	12 月 16 日	市民20人	鈴木辰己氏
	企画展関連講座（連続５回）	「三島の自然環境」	11 月 4 日	市民152人	加藤雅功氏
		「古代の集落の推移と遺跡」	11 月 15 日	市民193人	鈴木敏中氏
		「四辻の町―三島」	11 月 24 日	市民142人	杉村　斉氏
		「箱根の変遷」	12 月 8 日	市民135人	加藤利之氏
		「鉄道網の発達と三島の盛衰」	12 月 21 日	市民125人	樋口雄彦氏
	ふるさと講座（連続４回）	「北上地区を歩く」	9 月 28 日	市民27人	望月一夫氏
		「錦田地区を歩く」	10 月 7 日	市民30人	迫田信行氏
		「中郷地区を歩く」	10 月 14 日	市民28人	伊達　主氏
		「旧三島町を歩く」	10 月 28 日	市民28人	辻　真澄氏
出版活動	「郷土館だより」の発行	郷土館広報及び調査報告など	年　3　回	各1500部	無料配布
	「三四呂人形絵ハガキ」	野口三四郎作品写真	3 月 発 売	2000部	４枚セット100円
	企画展関連出版	①「句碑と拓本」パンフレット ②「三島の石造物」パンフレット ③「三島の成り立ちⅠ」図録		2000部 2000部 1000部	無料配布 無料配布 800円
	「三島宿本陣家史料集(11)」	樋口家本陣所蔵古文書「御往来控」を解読	3 月 発 売	300部	2,000円
	「広報みしま」に郷土シリーズ	郷土の歴史や民俗について紹介	毎 月 1 回		全世帯配布

終戦50年企画展「三島と戦争」を終了して

会　　期	平成７年７月23日～９月24日	会　　場	三島市郷土館一階展示室
開催延日数	54日間	入館者数	16,030人
資料寄贈者	25人（361点）	資料提供者	56人（462点）

１．開催までの経過

今年は、第二次世界大戦・太平洋戦争が終戦してから50年目にあたる。

戦争体験者が減り行く中、戦争を風化せず、次世代に戦争を伝えていこうという世論は高まっている。昨年秋の三島市議会において、戦争を伝える特別展を実施するよう要請もあり「三島と戦争」展が開催されるはこびとなった。

また、三島市においては昭和初期から終戦直後までの記録は極めて少ない。昭和30年代に編さんされた「三島市誌」にはこの時期についてほとんど触れられておらず、市役所の文書は、終戦直後にかなり焼却され、戦時中のものはあまり残っていない。

こうした中で、戦争中の郷土の資料を収集・調査し、記録に残すことは大きな意義があると考えられた。実際、戦争体験者が老齢化しており、今回の企画展は資料収集の最後のチャンスであったと思われる。

しかし、企画展開催にあたり、さまざまな問題点が浮かび上がった。

まず、現在の郷土館職員は戦後生まれであり、戦争に対する知識や生活感が乏しい。このため、有識者を中心に「三島と戦争展準備委員会」を設置し、この会で多くの助言・協力を仰いだ。

又、広く市民に資料提供を呼びかけたが、資料がかたよったものにならないか、見方によっては好戦的ととられないか懸念された。このため解説において戦争の残酷さに触れるよう努め、広島・長崎両市長から三島市に宛てて送られた「平和のメッセージ」を掲示し、平和の尊さをアピールするよう努めた。

さらに、「戦争」という多角的なテーマを、一地方都市の歴史に留めてよいかについて考慮された。戦争の真の悲劇は中国・東南アジアでの戦場や日本軍支配下で起こっており、日本での原爆投下や空襲の被害とも無関係であった三島を取り上げるだけで戦争の悲惨さを伝えられるか心配された。実際、限られた準備期間中に、広範囲の戦闘や多くの戦争の犠牲を調査するゆとりはなかったというのが実態であった。唯、三島の戦争下の調査をする中で、戦時中の特殊な社会情勢と学校教育が浮かび上がり、またさまざまな戦争体験談を取り上げることで、ある程度日本の敗戦への道を明らかにできるのではないかと考えられた。

オープニングセレモニー石井市長挨拶

２．資料収集と調査経過

「４月15日号広報みしま」で広く資料提供を呼びかけたところ、多くの方々から提供の申し出があった。50年の年月を経ても手離すことのできなかった品々には、戦死した父や兄弟への思いや、つらい軍隊生活、銃後を守り必死に生きた思いが封じ込められていた。

軍隊関係の資料以外に、墨塗り教科書や当時の紙幣・婦人会関係資料・金属の代用品等、社会生活を知ることができる資料が多く提供され、予想以上の資料の山に反響の大きさを感じた。

また、戦時中の三島関係の調査として、新聞からの三島関係記事の抜粋、三島の連隊（野重砲第二・第三連隊）の戦歴等の調査、三島の戦没者数及び市内の慰霊碑調査、軍需工場調査、詳細な年表作成、等が行なわれ、その成果は図録に掲載された。

3．来館者の反応

展示が始まり、来館者を見てみると、２つのグループに分けることができた。

１つは戦争体験者たちである。年齢60代以上、展示された品々は旧知のもの、青春時代を思い出すもので、「なつかしい」という声をあちこちで聞いた。また「２度と思い出したくない」という婦人の言葉も胸に響いた。

もう１つは、10代～30代の若い世代である。祖父母や親に説明を聞いたり、じっくり解説を読む姿が目立った。つい50年前、若い生命が赤紙一枚で吹きとんだこと、着るもの食べる物にも事欠いたことを、改めて実感したようであった。

展示は、実物資料と写真資料を中心としているため、当時の戦闘とか統制の厳しさを伝えるのは難しいが、展示資料から解説以上のものを汲み取ってもらえたように思われた。

今回の「三島と戦争展」を通じ、来館された方々がそれぞれに戦争について、そして平和の意義を考えてもらえたと信じている。

最後に今回の展示にご協力下さった、資料提供者や準備委員の皆様に厚く御礼申し上げます。

「三島と戦争」の図録を、１冊1,200円で
郷土館受付窓口にて販売しております。
お買い求め下さるようお願いします。

徴兵・出征と銃後の祈り

兵士の生活

戦時下の衣・食・住
空襲に備える

展　示　内　容

(1)　入口―戦時下の民家の復元
静岡新聞（昭和16年～20年の三島関係記事）燈火管制用おおい布（複製）、火はたき、標語（コピー）他

(2)　徴兵・出征
教育召集令状；臨時召集令状；出征幟旗日の丸寄書き、出征写真、朝日新聞（S16.12.9）他

(3)　銃後の祈り
千人針、弾除け信仰（竜爪さんの札）、雄の三毛猫の写真、軍事郵便、他

(4)　兵士の生活
軍事手帳、軍人勅諭、軍隊ラッパ、奉公袋、軍服、鉄カブト、軍靴、砲弾、銃の薬莢、防毒マスク、戦闘写真（読売新聞社）他

(5)　終戦と引揚げ
本土決戦配備要領、特別攻撃隊旗、召集解除証明書、善行証明書、罹患證明書、引揚げ証明書、捕虜収容所名簿、シベリア捕虜葉書他

(6)　戦没者と慰霊
遺書・遺言状、戦死公報、戦死之跡写真、葬儀写真、慰霊祭記念写真、「忠魂の家」標札、祭粢料（天皇・皇后両陛下より）、遺族年金証書他

(7)　野戦重砲兵連隊と三島
「師団兵営地指定の請願書」（明治38年）、重砲関係教科書、営外居住証、戦闘詳報（第11連隊第２大隊）
二・三連隊行動図、馬用バケツ、長靴と拍車他

(8)　将校の装備
将校用の大礼服、コート、海軍少尉軍服、佐官用軍刀、将校用背のう、海軍士官用短剣他

(9)　勲章・戦記・手記・戦時下出版物
功七級金鵄勲章、勲八等白色桐葉章、支那事変従軍記章、「私の戦記」、「聖戦美術」「戦ふ東条首相」他

(10)　戦時下のマチ・ムラ・隣組
愛国婦人会・大日本国防婦人会たすき・配給切符、衣料切符、米配給券（昭和19年）、戦時中の紙幣・貨幣・はがき・切手、三島燈火管制要領、戦時国債他

(11)　空襲に備える
焼夷弾（沼津大空襲）、砲弾の破片（東京大空襲）、薬莢（丹那トンネル爆撃）、B29の破片、防空頭巾、砂防弾、防毒マスク、罹患証明書他

(12)　戦時下の衣・食・住
国防婦人会上衣、標準服、モンペ、国民服、儀礼章、箱膳、茶碗（統制番号入）、羽釜（素焼、山中宿出土）、製麺機、ポンプ、火鉢、ガソリンストーブ、扇風機、柱時計他

(13)　三島の軍需産業
中島飛行機採用決定通知・赴任心得、日産皮革製剣つり（鯨皮）、日産皮革を慰問された秩父の宮妃の写真、駿豆鉄道時刻表・切符

(14)　戦時下の教育（初等・中等・青年学校）
石板、「銃後のお話集」、尋常小学校「修身書」墨塗り教科書（高等科図画）、慰問作文表彰状、英語教科書（墨塗り）田方商業写真・葉書、「海軍少年飛行兵」受験読本、「青年学校修了証」、木銃他

戦時中の教科書他

郷土教室　実施報告

市内小学校４～６年生を対象に、学校の第２土曜日の休業日を利用して、昔の生活や遊びなどを体験してもらう「郷土教室」を今年も開設しました。

既に４回実施したうちの２回分を紹介させていただきます。

第１回「機織（ハタオ）りと糸紡（ツム）ぎ」　６月10日(土)
講師　染色工芸家　井上一雄さん

初めに井上さんが、「人類はいつから衣（コロモ）を身につけるようになったのだろうか？」という興味深いお話しをして下さいました。

次に世界の各地でも、同じような糸機道具を使って着る物を織ったり、糸つむぎをしているような写真や模型を見せてもらいながらわかりやすく説明して下さいました。

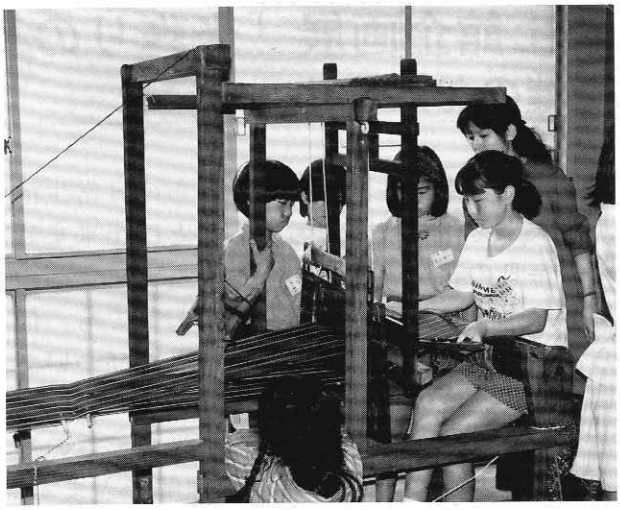
お話しを聞いたあと、２グループに分かれ１グループは機織りを他の１グループは「コマ」を使い羊毛から毛糸を紡ぎました。

先生がまず見本を示して下さいましたが、いざ、子どもたちがやってみると細くなりすぎて途中で切れたり、太すぎる毛糸ができたり上手にできません。

機織りでも先生が手本を示すとリズミカルに「トントンカラリ」と軽快な音をたてて、みるみるうちに布が織り上がっていきます。

さて子ども達の番です。
横糸を通す道具である杼（ヒ）を勢い余って落としたり、手と足がバラバラになり足を踏み違えたりと失敗をくり返しながらも、段々上手に織れるようになりました。

最後に、自分が織った部分の布切れをもらい子ども達も満足そうでした。



第２回「竹細工作り」　７月８日(土)
講師　竹細工研究家　瀬川　到さん

初めに、ナイフの使い方の注意があり、ぎこちない手つきですが真剣に「竹とんぼ」を作りました。ようやく羽根の形ができ、キリで穴をあけ、柄をつけて竹とんぼができ上がりました。早速、外で飛ばし、自分の竹とんぼの出来ばえに大喜びでした。

午後からは、「竹ぶえ」作りに挑戦しました。ウグイスの鳴き声が真似ることができるような立派な竹ぶえができた子もいましたがなかなか音が出ないで苦労した子もいました。

とにかく、最後まで自分で作り上げたことに喜びを感じて皆楽しい時間を過しました。

郷土館企画展「米作りのくらし」
開催のお知らせ

米は日本人の主食です。私たちの日常生活から、米を切り離して考えることは出来ません。毎日の三度の食卓においても、また酒のように米を原料とした食品類においても、何らかの形で、日本人の生活は米と結びついています。歴史的にも、米が重要物資の地位を占め続けてきたことは、かつて米が年貢の基本穀物とされてきたことでも理解できます。

このように、日本の経済と、食生活を支えてきた米作りが日本の農業の中心であったことは言うまでもありません。米作り農業（稲作）の歴史は古く、人間が水利を生かす知恵を持ち、台地から低地へと移動定着をはじめた弥生時代が始めだといわれてきました。

また、永い稲作の歴史は、日本人の生活にも大きな影響を与えました。春から秋の終わりまでの約一年間をその生育に必要とする稲作は、人々の一年の生活時間を規制し、日常生活のリズムを構成しました。今でも各地の農村で伝承されている年中行事の数々は、その大部分が稲の生育に合わせて行われる行事である点を見ても、稲作と人の生活との関係の深さが理解できます。

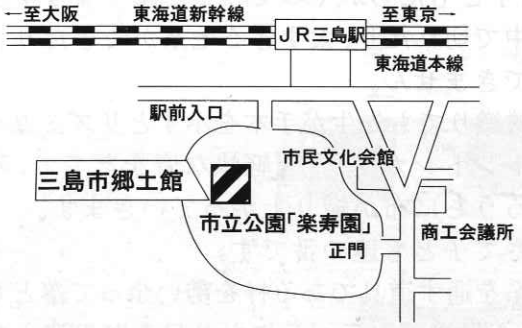
本企画展では、この米作りに関わる人々のくらしを、農具や年中行事で展示してみます。

記

1　テーマ
　企画展「米作りのくらし」
2　開催期日
　平成７年11月19日(日)～平成８年１月28日(日)
3　会　　場　　三島市郷土館　１階展示室
　（三島市一番町19－3　楽寿園内　TEL71－8228）
4　展示内容
　(1)　米作りの一年　（農作業と年中行事）
　①苗代作り　②種蒔き
　③苗の育成　④苗取り
　⑤代かき　⑥田植え
　⑦田の草取り　⑧水かけ
　⑨稲刈り　⑩脱穀
　⑪籾摺り　⑫収蔵
　(2)　三嶋大社の「お田打」の所作に見る米作り過程
　田起こし、よし草しき、代かき、種蒔き、田まわり、鳥追い、雨ごい、（詞）
　(3)　米作りの農具今と昔
　鍬、代かき、鋤、縄と縄張り棒、田転がし、鎌、唐うす、脱穀機
　(4)　大切な水と土
　土の質と肥料
　（ハダイ、カンデン、シツデン）
　水の利用
　(5)　食生活の中の米
　日本の米と外国の米
　米を食べる（蒸す、炊く）
　米を原料とする食品類

利用案内

休館日　毎週月曜（祝日の時は翌日）
　12月27日～１月２日
開館時間　午前９時～午後４時30分
入場無料　（但し、楽寿園入場の際、有料）



三島駅（南口）から徒歩５分。市立公園楽寿園内

郷土館だより　No.52
平成７年11月30日発行
（年３回発行）
編　集　三島市郷土館
住　所　〒411 三島市一番町19-3　楽寿園内
TEL　0559－71－8228
FAX　0559－81－3730
発　行　三島市教育委員会